
魔法使いになりたいから

椰子カナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いになりたいから

【Zコード】

Z5097Z

【作者名】

椰子カナタ

【あらすじ】

アンティークショップ『螺旋の環』。ここに住む高校三年生、風代朔羅は、転校生・鞘上絹枝と出会う。共に『螺旋の環』で暮らす事になった彼女たちの織り成す現代ファンタジー。『IRIS//RAGNAROK』の спинオフ外伝。pixivで連載中の作品を随時転載中です。

プロローグ

身体が熱い。

片目がズキリと痛む。

痛めば痛むほど、体は焼けるように熱を帯びていく。地下通路を歩く彼女の足取りは酷く重かつた。身体を引きずるよう、壁に肩を預けながら懸命に歩き続けている。痛みに顔をしかめ、息を切らせながら歩く。

それもその筈だ。彼女の着ている衣服は既にぼろぼろで、それどころか全身が傷だらけであった。幸い出血量は少ないようだが、それでも傷口から流れる血が、彼女の歩いてきた道の上に間を置きながらも落ちている。

もう体力も限界を迎えていた。それでも歩き続けるのは一体何の為だつたろうか。朦朧とする意識の中ではそれすらおぼろげだった。身体が熱い。

片目の痛みは増していく。ズキリと響く鼓動のような痛みは、やがてキリキリと鍼か何かで抉られるような痛みに変わっていく。ここまで痛むのは彼女にとつても初めての経験だった。痛むのにはもはや目だけでは済まない。彼女の中に流れ込んでくる暴力的な何かが彼女の心を痛めつけていく。

その目は、そういう類の代物だった。

「……ツ！」

声にならない悲鳴を上げて彼女は蹲るようにその場に倒れ込んでしまった。

誰もいない。昏い地下通路に彼女以外の姿はない。彼女を救助できるような者はどこにもいなかった。

だが彼女にはもう、立ち上がるだけの力は残されていない。痛みの中、彼女の意識は薄れしていく。

私、死ぬの、かな。

だが忽然として、彼女の前に現れた人影があつた。もはや衰弱しきつた彼女がそれに気付いたかどうかは定かではないが、その人影はまるで彼女がこんな状態になるまで登場を控えていたかのようなタイミングで現れた。

彼女を見下ろす人影の表情は窺い知れない。口を開いて呟いたのはたつたの一言だった。

「死なせはしないさ」

その声は彼女に聞こえたかどうか。

意識を失う間際、最後に思い浮かべたのはたつたひとりの妹の姿だった。

第一話 転校生は同居人

1.

「ほら、行くわよ朔羅」「

アンティークショップの看板を掲げた『螺旋の環』店内には、所狭しと骨董品が並べられている。

鏡や置物、果ては屏風などといったラインナップは古今東西の骨董品を網羅していると言つていいくだろう。この四月に高校三年生になつたばかりの風代朔羅には、それらがどれだけの値打ち物なのかさっぱり分からぬのだが。

「それじゃ、行つてくるね。みゅう」

店の奥に鎮座するカウンターの上に、一匹の黒猫が寝転がついた。みゅう、というのは彼の名前だ。朔羅が名付けた。飼い主である筈の『螺旋の環』オーナー、柊蘭が好きに呼ぶといふと言つたので、その鳴き声からとつたのだ。

みゅうの頭を撫でて、朔羅は骨董品の間を縫うように入口へ向かう。ドアの前で彼女を待つていた穂叢なぎさは、朔羅が隣に並ぶと彼女と共に店を後にした。ドアを閉めると、吊り下げ型の看板が揺れる。

『螺旋の環』。古風な造りの洋館はそれそのものがアンティークのようだ、この辺りではちょっとした名物になつてゐる建物だ。朔羅となぎさにとつては幼い頃から暮らしている家もある。彼女らに既に親はない。ここのお一人であつた赤羽サツキによつて拾われ、彼女を親代わりに育つてきたのだ。

お陰で朔羅となぎさ、一人は姉妹のように仲がいい。同じ年で、今も同じ高校に通う二人は共に生徒会の役員を務めているなど一緒にいる時間は長い。

いつもして登校を共にするのも毎朝の事だ。時に日直などの用事で

どちらかが早めに家を出る事もあるが、そういうた例外を除けばいつもと変わらぬ登校風景がそこにあるつた。

「転校生ってどんな子かな？ 楽しみだよね」

「朔羅は隣の席よね。ちゃんと仲良くしなさいよ

「む、分かつてますよーだ」

今日は彼女たちのクラスに転校生がやつてくると聞いていた。分かつているのは女子生徒であることと朔羅の隣の席になる事だけだつた。先日転校生の為の机を用意するのを手伝つた朔羅は、新しい出会いを待ちきれない様子である。

「あ、あれ水輝君じゃない？」

朔羅は数十メートル先の交差点で、信号待ちをしている一人の男子生徒を見つけた。彼女らと同じ学校の制服に身を包んだ彼の姿は遠目に見てもとても目立つものであつた。日本人らしからぬ金髪に碧眼、肌は白く、顔立ちも日本人離れしている。月島水輝。日本人とフランス人のハーフである彼は、朔羅たちの一学年下に当たる後輩で、同じ生徒会役員である。

「水輝くーん！」

「朔羅、危ないわよ。……もう」

水輝に向けて手を振つて駆け出した朔羅に、なぎさは後ろから注意を促すも聞き入れられる事はなかつた。いつもの事なので諦めるのも早い。

なぎさが制止をかけたのはもちろん、朔羅の気質故だ。案の定、朔羅は途中で何かに躊躇して体勢を崩す。

「わわちょ

その場に倒れかかつたところで、間一髪誰かがその手を取つた。

朔羅の対面から歩いてきていた通行人の男性だつた。短髪に凛々しい顔立ち、銅色の肌、黒い髪の男だ。歳は三十半ばから後半といったところだろうか。

男性は顔を上げた朔羅に、どこか不敵な笑みを投げる。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん。足元には気を付けた方がいいぜ」

「あ、は、はい。ありがとうございます！」

「よし、いい子だ。ほら、わやんとお姉ちゃんに学校まで送つてもらうんだぞ」

歩み寄り、頭を下げるなぎさに朔羅を預け、男性は去つていった。煙草のフレーバーの匂いが離れていく。

「おはようございます、風代先輩、穂叢先輩」

朔羅たちに気付いた水輝が、こちらへ道を戻つてきていた。なぎさは挨拶を返したもの、朔羅は俯いたまま動かない。

「風代先輩？」

水輝が声をかけると、朔羅は大きく腕を広げて声を上げた。

「私、高校生だもん！」

2 .

「転校生を紹介する。鞘上絹枝だ。君たちと席を共にするのはあと一年だけだが、よろしく頼む」

三年四組担任、雀ヶ森香歩は教卓の傍らに佇む転校生に自己紹介を促した。転校生は黒板に自身の名前を書く。控えめな大きさでそれを書き終えると、彼女はゆっくりと振り返つた。

「鞘上絹枝、です。よろしくお願ひします」

絹枝は微笑みながらゆっくりと、しかし深々と頭を下げる。長く綺麗な黒髪が前に落ちた。頭を上げ、それを搔き上げる仕草が妙に艶っぽい。雀ヶ森が朔羅の隣の席に着くよう促すと、一步一步、独特的のリズムで歩いて着席する。朔羅はこのリズムにどこか違和感を覚えたが、それが何かは分からなかつた。

隣の席に座つた絹枝へ、朔羅は微笑みかける。

「私、風代朔羅。よろしくね、鞘上さん」

「……風代、さん。うん、よろしくね」

声をかけられた絹枝は一瞬きょとんとしていたが、すぐに微笑み

を返してくれた。おつとりした子だな、といつのが朔羅が抱いた第一印象だった。

転校生の紹介も終え、雀ヶ森は淡々とホームルームを始める。出席の確認を終え、連絡事項を済ませると肃々とホームルームを終えた。黒板に刻まれた絹枝直筆のサインを指して、「授業が始まるとでに消しておいてくれ」とだけ言い残して教室から去つて行つた。ホームルームが終わるや否や、朔羅は立ち上がって絹枝の隣に立つ。

「鞠上さん！」

朔羅の声に教室中が色めき立つ。「よつ、特攻隊長」などという声が上がる辺り、このクラスにおける朔羅の立ち位置は既に確立していた。

ちなみに朔羅は立ち上がつているにも関わらず、座つている絹枝とは一度同じくらいの高さで目線が合うようになつていて。見上げる必要も、見下ろす必要もなく横を向いた絹枝は、どこか見惚れるよつよぼつ、と朔羅を見つめていた。

朔羅はビシッと手を上げて尋ねる。

「絹枝ちゃんつて呼んでいいですか！」

「あ、私も」と他の生徒たちも隨時それに続いていく。この勢いに呆気にとられていた絹枝だったが、やがてこくんと頷いた。そうしてものの数秒で、絹枝の呼び方は「絹枝ちゃん」で定着していくた。

「私の事も朔羅つて呼んでねつ！」

やがて絹枝の周囲には朔羅を筆頭に女生徒たちの輪が出来上がる。絹枝への質問攻めは一時間目の英語を担当する教師が現れるまで続いた。

「ほり、転校生と仲良くするのもいいけど、休み時間にしてくれよ
「はーい！」

英語教師の声に、輪に加わっていた生徒たちは順次自分の席へ戻つていく。

朔羅の前の席であるなぎさが絹枝を振り返り、声をかける。

「『めんなさいね、うるさい子で。私、穂叢なぎさ。この子とは一緒に家で暮らしてるの。よろしく

「つづん、大丈夫。すごくかわいいになつて思つたから。よろしくね、

穂叢、さん」

3.

放課後となり、生徒会の会議を終えた朔羅はなぎさと共に帰路に就いていた。本来なら絹枝とも一緒にかつたところなのだが、彼女は「引っ越しの片付けが終わつてないから」と言つて先に帰つてしまつた。残念だが、そういう事情なら仕方ない。

朔羅たちの学校はゆるやかな坂の上にある。坂の下まで降りてこれば、朝に水輝と会つた交差点まで辿り着く。水輝とはそこで分かれ、朔羅たちは『螺旋の環』へと向かつて真つすぐに帰つていく。

「桜、散っちゃうねえ」

「そうね。このままだと、四月が終わる前になくなるかもしれないわね」

四月の空に桜の花びらが舞う。短い桜の季節が終われば、春と夏の境目が訪れる。

「あと、一年かあ」

朔羅は眩しそうに桜吹雪を見つめた。あと一年で高校生活も終わりを迎える。朔羅もなぎさも進学を決めていたが、この街からは離れる事になる。卒業すればこれまで一緒にいたクラスメイトたちと会える機会はほんくなるだろつ。

だが朔羅は感傷に浸るわけでもなく、なぎさに笑顔を向けた。

「それじゃあ、めいっぱい楽しまないとねつ」

やがて周囲のベッドタウンから切り離されたかのような佇まいを見せるアンティーケショップの看板が見える。『螺旋の環』の入口を潜り、朔羅たちは帰宅した。

「お帰り、二人とも」

二人の姿を確認して声をかけてきたのは、オーナーである柊蘭だ。眼鏡の奥のどこかミステリアスな美貌に静かな微笑が浮かぶ。

「そうだ、よかつたら彼女を手伝つてあげてくれないかな。引っ越しの片付けをしているんだけれど、どうやら色々と余計なものを渡ってきたようなんだ」

引っ越し。一体何の話だろ？ お腹に落ちないながらも何か引っかかるのを感じた二人は、一階への階段を上りだした。『螺旋の環』の一階は居住スペースだ。手前に個人部屋が並び、一番奥にリビングやキッチンといった共有スペースがある。

朔羅となぎさの部屋は一番手前側にあつた。廊下を挟んで向かいになるように配置されている。ここに暮らしているのは今は朔羅、なぎさ、蘭の三人なのだが元々宿舎としての役割も兼ねていた建物であつたために部屋の数が多い。

蘭の部屋は共有スペースに最も近い奥の部屋だ。そのため朔羅の隣部屋はもちろん空き部屋であるはずなのだが、今日に限つてはそのドアが開かれ中から物音がする。

「あのー、よかつたらお手伝い……」

朔羅が恐る恐る部屋を覗いてみると、すると彼女は中にいた人物と目を合わせて固まつてしまつた。なぎさも顔を出す。

「やっぱり、あなただつたのね朝上さん」

「朔羅、ちゃんと穂叢、さん」

絹枝は朔羅となぎさの登場に心底驚いた様子だった。

誰かが階段を上つてくる音がする。振り返れば蘭が「ちらへやつてきていた。唖然としている朔羅たちを見て、彼女は呑気にああと得心する。

「そうか、君たちには言つていなかつたね。今日から絹枝君もこの『螺旋の環』で暮らす仲間だよ。実は彼女は私たちの師匠、赤羽サツキの娘さんでね。師匠の頼みでここで預かることになつたんだ」

「え、む、娘つて、師匠に子供さんがいたんですか…？」

「まあ、そう驚かなくてもいいんじゃないかな。八十を過ぎてもあの身体なんだ。何をしているかは推して知るべし、といったところだよ」

そう言われば確かに、と朔羅たちは納得する。『螺旋の環』前オーナーである赤羽サツキは八十年を自称しているもののその容姿、身体付きは二十代後半から三十代前半辺りで保たれている。明らかに異常な若さだったが、その理由を知る彼女たちは絹枝といふ確たる存在を前に納得せざるを得ないのである。

「え、えと」

朔羅は絹枝に向き直る。

「改めて、ようしくね？」

目を見開いて呆然としていた絹枝だったが、その表情はやがて柔和な微笑みに変わる。

「うん、ようしくね」

朔羅となぎさは自室に鞄を置いて、絹枝の手伝いを始めた。ベッドに机、布団に鏡にタンス。妙に多くの家財道具が室内にひしめいていたが、どうやら全て彼女の母たるサツキから渡されたものであるらしい。あれもこれもと必要そうだと思われたものを手当たり次第与えられたのだろう。明らかに部屋の容量を大きく超えていた。閉店作業を終えた蘭も交え、片付けは部屋に置く物と置かないものの整理へと入っていた。使わないものは空いている部屋を物置代わりに、そちらへ仕舞う事となつた。サツキには悪いが、よく考えずにぽいぽい物を渡したあなたが悪い。以外に親バカなのかなと朔羅は思うのだった。

「お疲れ様、三人とも」

労うとともに、蘭は全員へ紅茶を振る舞つた。リビングのテーブルに着いて息を吐く朔羅たちの前に、紅茶の深い香りが漂う。蘭は自身の紅茶に真っ先にミルクを注いだ。イギリス人の祖母を持つクオーターであるところの蘭は、祖母の影響か紅茶は確実にミルクティー一択だ。

「蘭さん、結構体力あるんですね
蘭の様子を見て、なぎさが言った。

「そうでもないよ。私は殆ど見ているだけだったからね」

ぐつたりとはいかないまでも本当に疲れた様子の高校生三人に対し、蘭は優雅に紅茶を口にしながらケロリとしていた。朔羅からしてみれば別にそんな事はなかった気がするのだが。この人はこの人で結構謎だ。

「では、一休みしたら夕食にしよう。今日は絹枝君の入居祝いだからね、いつもより豪勢にいこうか」

『螺旋の環』では蘭が食卓を切り盛りしている。といつても、彼女自身はあまり料理が得意という訳ではないのだが。

「あれ、そういえばみゅうは今日はいりませんか？」

朔羅の問いに、蘭は今更気が付いたかのようになあと声を出す。

「今日は朝に出て行つた切りだね。まあ、彼は気紛れだから。またいつか戻つてくるよ」

呑気に囁いて、呑み干したカップを手に蘭はキッチンへ向かった。

風代朔羅は魔法使いだ。

「なぎさちゃん、いっくよつー。」

「了解！」

朔羅が蹴り飛ばした犬のような四本足の獣が、逃げ惑うようになぎさに突進していく。小型犬と大差のない体躯だが、中身はれつきとした化け物だ。

深夜の公園に人の姿はない。結界によつて表の世界から隔絶されたここに一般人の入り込む余地はないのだ。この結界は朔羅たちが用意したもので、魔法使いの戦いには必要不可欠なものだ。人目を気にすることも、被害を気にする必要もなく戦うことができる。

朔羅の声になぎさの手から迸る電撃が鞭のようにつねり、獣型の化け物へ放たれる。雷鞭は化け物の身体に巻き付き、スタンガンのようになに電撃による衝撃を「えながら捕縛する。

「朔羅！」

「うん！」

朔羅は手にした三日月形の処刑鎌を振りかざして飛び上がる。

「せーのっ！」

氣合とともに鎌を振り下ろして、化け物の身体を両断する。生命力を失つた化け物は霧のように霧散して消えた。

朔羅は着地して武器である鎌を消す。この鎌はマテリアライズと呼ばれる魔法で武器化した彼女自身の魔力だ。彼女の意志一つで顕現も消失も可能であつた。

「よつし！ これで今日も任務かんりよ

「まだよ朔羅」

『みつしょんこんふりーと』を宣言しようとした朔羅の言葉を遮

つて、なぎさは朔羅の背後に雷鞭をしならせる。

振り向けば、今しがた倒したばかりの化け物と同型のそれが、朔羅に食らい付こうとして飛び掛かってきているところだった。油断していた。残された一匹が、この瞬間を狙つて息を潜めていたのだ。なぎさの雷鞭がうねりを上げ、化け物を地面に叩き落とす。

尚も化け物が立ち上がろうとしたところへ、銃声。化け物は銃弾に撃ち貫かれて消えた。

音のした方を見れば、一丁拳銃を手にした水輝がこちらへ爽やかな笑顔を向けていた。

「風代先輩、大丈夫でしたか？」

「うん、ありがとね二人とも」

朔羅が礼を言うと、安堵したように微笑んでくれた水輝とは対照的になぎさは慄然と朔羅を見やる。

「まったく、敵を倒した瞬間に気を抜き過ぎなのよあんたは」

図星だった。朔羅は「だつて……」などと抗議し始めようとしたが、続く言葉が出てこない。

「まあ、いいわ。それは次の任務の課題にしましょう。それで月島君の方は終わったの？」

朔羅たち三人は二手に分かれて任務に当たっていた。一匹一匹は大して手強いわけではなかつたが数が多い。包囲されると一番劣勢になりやすい朔羅のサポートになぎさが付く形で、水輝は一人での包囲網を抜けてきたのだ。

「はい、こちらも全て倒しました。もうこの辺りに魔はないようですね」

水輝の手から銃が消える。無論、マテリアライズされたもので実銃ではない。彼の持つ風の属性を『えられて具現化されたそれは、魔力を風弾として精製し撃ち出す事のできる代物だ。質量こそ実弾に劣るもので、遙かに早い弾速で容赦なく敵を撃ち貫く威力を持つ』ている。

「それじゃあ改めて、今日も任務完了だね！」

朔羅の宣言に、なぎさと水輝は頷く。「もう、調子いいんだから」となぎさが溜め息交じりに零したが、その表情は優しげだ。と、そこへ拍手の音と共に蘭が姿を現した。隣には絹枝の姿もある。

「お疲れ様、みんな」

蘭の労いの言葉に朔羅たちは笑みを浮かべる。

『螺旋の環』。表向きにはアンティーケショップとして軒を連ねている店舗だが、その本来の姿は魔法使いギルドと呼ぶべきもの一つだ。

世界の裏側には魔と呼ばれる化け物どもが跋扈している。この世の生物を遙かに凌駕する能力を持つそれらに対抗できるのは、同じく人外の力を備えたものたちだけだ。

魔法使いと呼ばれる人種もその中の一つであった。彼らは魔という存在の持つ力を逆に利用する事で力を得た異端で、人の身でありますながらも魔と同種の力を持つ。

魔法使いギルドとはそんな彼らの活動拠点として機能する組織だ。『螺旋の環』も無論その役目を持つ。かつて大魔法使いと呼ばれるほどの二人の魔法使いが共同で創設したことには、その伝手を辿つて様々な依頼が舞い込んでくる。

今日のこの戦いもその内の一つだ。ただ、近隣に出没する魔を排除してほしいという依頼はそう珍しい物でもない。珍しくはないのだが。

「それにしても、最近は多いですね」

水輝の言葉に朔羅となぎさは辟易したような表情を浮かべた。ここ最近、こうした魔の出没する頻度が日に日に増していた。現れるのは力の弱い低級な魔ばかりだが、連日の戦いで朔羅たちの疲労は確実に蓄積している。このままではいずれ、彼女たちだけでは対抗できない事態に陥ってしまう恐れもあった。

蘭は顎に手を当てて考え込むような仕草を取る。

「うん、やはりお祖父さんがいなくなつたのは大きいか……」

眩くと顔を上げ、朔羅たちと視線を交わす。

「五大英雄の一人、扇空寺辰真が人柱だったという話はしたね。去年、魔の力を弱めていた人柱である彼が亡くなつた事で、彼らは確実に力を取り戻し始めているようだね。このままなら力を完全に取り戻した上級の魔が現れるのは明白。 そうなるとこの人数ではとても対処しきれない」

50年前、元魔戦争と呼ばれる世界の命運を賭けた戦があつた。元魔と呼ばれる遙かに強大な魔の軍勢を率いて、世界を滅ぼそうとした終焉の魔神ラグナロク。それを打ち破つた五人の勇者の名は、五大英雄として現代まで称え続けられている。

その内の一人、扇空寺辰真は元魔を封印するための人柱としてその身に鍵を宿した。彼が没するその日まで、元魔は次元の彼方に封じられ、世界に蔓延る魔たちは力を弱められる事となつたのだ。

弱体化を強いられた魔たちはその身を闇に隠した。怨敵の死を待ち、再び力を取り戻すべく潜み続けた。扇空寺辰真が亡くなつたのは一年前の事だ。この時を虎視眈々と狙い続けてきた魔たちが台頭していく日が近いのを、朔羅たちは充分過ぎるほどに実感していた。「そこで、だけれど」

蘭は絹枝を振り返つた。全員の視線がそちらに向かう。

鞘上絹枝。朔羅たちの師であり、『螺旋の環』を創設した一人である大魔法使い赤羽サツキの娘である彼女ももちろん、その血を受け継いだ魔法使いであるのは言つまでもない。

「どうかな、絹枝君。私たちの仕事を手伝つてくれる気はないかい？」 師匠からは散々こき使つてくれと言伝されているけれど、私は君の意思を尊重しようと思つてゐるよ」

蘭はそう言つて解散とした。

『螺旋の環』に帰つてきた朔羅は、自室のベッドの上で思い出す。結局、絹枝の返答は「考えてみます」というものだつた。一緒に戦える仲間が増えるものだと思つていた朔羅にとつては残念な答えだつたが、かといつて無理強いもできない。なにせ魔との戦いは本当に命のやり取りだ。絹枝にどれだけの力があるかは分からないうが、戦い慣れている朔羅たちにとつても過酷なものに、今日出合つたばかりのクラスメイトを無理矢理巻き込めるはずもない。

そもそも朔羅たちはまだ修行中の身だ。更に言えば朔羅はなぎさや水輝に比べて出遅れている。今日のよつてにベンチを招く事も少なくない。そんな朔羅が一緒に戦おうと言えば、自分の身は自分で守れと言つていいようなものだ。朔羅から誘つのは難しい。

「鞘上絹枝ちゃん、か……」

朔羅は思い直す。それよりも彼女とはまだ今日が初対面なのだ。まずは普通の友達として。仲良くできたらなと思つ。

ガラツ、と隣の部屋で窓の開く音がした。ベランダに足音が響く。絹枝ちゃん？ と朔羅は起き上がつてみた。四月も半ばだがまだ夜は寒い。深夜を回つている今、夜風に当たるのは身体に悪い。声をかけてあげないと、と朔羅も窓を開けてベランダに出る。

「朔羅、ちゃん」

個室のベランダは繋がつてるので、朔羅は絹枝の元へ歩み寄る事ができた。

対して絹枝は、心配そうに朔羅を見つめている。

「風邪、引いちやうよ」

絹枝の言葉に朔羅は苦笑した。

「それ私が言おうとしたんだけどなあ」

「ありがとう。でも私、大丈夫だから」

絹枝は手摺りに手を置いて、夜の街に視線を向ける。何の変哲もない寝静まつたベッドタウンがそこに佇んでいる。

「眠れなくて。ちょっと夜風、当たりたくなつて」

ぼんやりと、しかしどこか初めて見るものに対しての憧憬のよつなものを秘めた眼差しで、絹枝は街を見つめていた。

「珍しいかな、こいつうところ」

え、と絹枝は朔羅に視線を戻した。しばし呆けたよつて顔を瞬いた後、再び街並みを眺めて答える。

「つうん。……ただ、私、初めてなの」

絹枝の言つ初めての真意が朔羅には分からなかつたが、きっと今まで絹枝が住んでいたのはとんでもなく都會か、のどかな田舎かどちらかなのだろうなと朔羅は思った。

「絹枝ちゃんがここに来る前はどんなところにいたの？」

「どんな……」

絹枝は夜空を見上げた。遠い故郷に思いを馳せるかのよつて、ゆつくりと語り始める。

「森、だつた。広いけど、囮まれて他に何もないような場所。こみたに賑やかじゃないけど、みんながいたから楽しかつた」その類を一筋の線が伝つた。あまりに自然に流れたそれに、朔羅は驚く事もできずにただ彼女を見つめていた。

絹枝は顔を抑えてそれを拭つた。きっと友達の事を思い出したのだろう。

「ごめんね、急に。……朔羅、ちゃんは、ここに来る前どうしてたの？」

今度は朔羅が夜空を見上げた。

「私ね、ここに来る前のことよく覚えてないんだ。気付いたら師匠がいて、なぎさちゃんがいて、蘭さんがいたの。ここに来た時私は小学生だつたんだけど、それまで何をしてたか全然覚えてなくて」

小学五年生だつたらしい朔羅は、突然何もかも知らないものに囲まれた生活が始つた。それでも今までじつしてこられたのは『螺旋の環』のみんなのお陰だつた。

「でも私、全然気にしてないよ！ 別に思い出したいとも思わないし、今一緒にいるみんなが好きだから」

だから、と朔羅は絹枝に向けて笑みを作る。

「絹枝ちゃんとも、仲良くしたいなつ」

絹枝は不意を突かれたかのようすに朔羅を見やつた。だが朔羅が笑みを向ける内にやがて、その顔に微笑みが浮かぶ。

「うん。私、も、仲良くしたいよ」

尚も絹枝の頬を伝う涙は、しかし先ほどとは別のものだらう。朔羅にはそう見えた。

「よろしくね、絹枝ちゃん」

「ひがいひそよろしく、朔羅、ちゃん」

ぐつ、と呻き声を上げて絹枝は突然右目を抑えて蹲つてしまつた。

「絹枝ちゃん！？」

「ツ！」

苦悶の表情を浮かべる絹枝の額には汗がにじんでいた。相当辛そうだ。朔羅は彼女を抱きかかえて部屋に戻りうつと、絹枝の肩に触れる。

「朔羅、ちゃん……。あなた、の記憶、は？」

だが朔羅が絹枝を支える前に、彼女は気を失つてしまつた。倒れかかる身体を何とか抱き留めたものの、朔羅の頭からは絹枝が言いかけた言葉が気になつて離れなかつた。

部屋に運んだ絹枝の身体はベッドに寝かせた。既に安定した眠りに就いてはいるが、彼女を見つめる朔羅の表情は重かつた。

「彼女の右目、どうやら師匠と同じ千里眼のようだね。まだ制御ができていないんだろ？。気が緩んだ瞬間に何かを見てしまつたんじやないかな」

絹枝の様子を眺めらおうと連れてきた蘭は、分析の結果をそう伝えた。

千里眼。全ての本質を見通すと言われるそれは赤羽サツキの右目

にも宿つてゐる。娘である絹枝にもそれがあるのは「ぐく自然の通りだつた。

「幸い、今は落ち着いてゐるよ」だからね、彼女には明日から魔力制御を教えていってあげよう。さあ、今日はもう遅い。しつかり寝て明日に備えよう」

蘭はそれだけ言い残して絹枝の部屋から去つて行つた。

「ほら、朔羅

「うん……」

同じく連れてきたなぎさに引っ張られる形で、朔羅は絹枝の部屋を出た。

後ろ手にドアを閉めて、朔羅はそれにもたれかかった。俯く彼女に、なぎさは肩を竦める。

「もう、あんたがそんな顔してたら、鞘上さんも引け目を感じちゃうでしょ」

「そう、だよね……」

だが朔羅の表情に変化はない。絹枝が見てしまったものはきっと。そう考えるとどうしても、絹枝が倒れたのは自分のせいであるような気がしてしまつ。

「とにかく、今日はもう寝なさい

朔羅が頷くと、なぎさは自分の部屋に戻つていつた。

朔羅も自室に戻り、ベッドに潜つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5097z/>

魔法使いになりたいから

2011年12月19日10時49分発行